

ISSN 0910-2396

# 野鳥だより

—北海道—

北海道野鳥だより第154号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成20年12月21日

ウミアイサ



2008. 1. 28 小樽港

撮影者 田中 洋 (札幌市北区)



# も く じ

小堀師匠のこと、鳥のこと  
 中島 祥一 (日本野鳥の会東京支部会員、元北海道野鳥愛護会会員) ..... 2  
 北海道におけるカワウの分布拡大  
 NPO法人バードリサーチ 加藤ななえ ..... 4  
 絶滅危惧種シマアオジをどう守るか(1) 減少の実態  
 北海道環境科学センター-自然環境部 玉田 克巳 ..... 6  
 北海道におけるキジバトの繁殖期の分布  
 美唄市 藤巻 裕蔵 ..... 8  
 鳴き声で北海道の野鳥を識別する試み  
 札幌市厚別区 田辺 至 ..... 9  
 山階鳥類研究所紹介  
 (財) 山階鳥類研究所広報室長 平岡 考 ..... 12  
 探鳥会ほうこく ..... 14  
 探鳥会あんない ..... 18  
 鳥民だより ..... 18

## 小堀師匠のこと、鳥のこと

中島 祥一 (日本野鳥の会東京支部会員、元北海道野鳥愛護会会員)

鳥見の楽しさを「小堀師匠」から直接伝授してもらったのは、かれこれ20年も前のことになる。図鑑「北海道の野鳥」(北海道新聞社刊)の解説者・小堀煌治君と私は道新の同期(1965年)入社。よく一緒に飲んだが、あるとき酔った勢いで、飲み仲間ともども「鳥見に連れて行け」とごねたのをきっかけに、師匠と弟子の関係を結ぶこととなった。

ハシブトもハシボソも同じカラスにしか見えなかった超素人の仲間10人ほどを引き連れ、彼はウトナイ湖や定山溪の山林、宮島沼、小樽港など、あちこち案内してくれた。その度に鳥の名前や特徴を手ほどきしてくれるのだが、うれしそうに案内する彼を見ていて、舌を巻いたのは、ただの草原や木の茂みにしか見えない風景の中から「ほら、あそこにコヨシキリ」「あの奥の枝にハヤブサがいる」と、たちどころに5種、10種の野鳥を探し出し、右往左往する私たちにフィールドスコープに収めた「証拠」を見せてくれる鳥探しの技だった。

「見えようが見えなからうが、たかが鳥、暮らしに不自由はない」。そう強弁したい気持ちもあったが、少しずつ鳥が見え始めるほどに、胸の中で何かが膨らんでくる。なんとなく豊かで優しい気持ちになっているのだ。「これがバードウォッチングの楽しさ?」。今思えば、そんな一人勝手の得心が野鳥の魅力に引き込まれるきっかけとなった。

それにしても道は遠い。動物界100万種に脊椎動物門は約4万3千種、このうち鳥綱は約9千種もいるのだ。日本の棲息数は約500余種というが、上級ウォッチャーの中に

は、ただでさえ見分けづらいカモメ科の幼鳥の、1年目の換羽、2年目の換羽まで識別する目を持つ人までいると聞く。踏み込んでみたものの「分け入っても分け入っても青い山」(種田山頭火)の気分は消えない。

最近、興味深い本を読んだ。アメリカの心理学者でギリシャ人の祖父母を持つ、セオドア・ゼノフォン・バーバー氏が、鳥類の知能と行動を6年間調査してまとめた「もの思う鳥たち」(日本教文社刊)。

この中で氏は、

・鳥類は、音楽を鑑賞、作曲、演奏する能力を持ち、喜んで遊び、生活上の問題を柔軟な知能で解決する能力を少なからず持っている。

・鳥は、知能や意識や意志を持っているばかりでなく、人



熱心に鳥合わせをする会員たち  
(9月の千葉・葛西臨海公園で)

間と知的なコミュニケーション、思いやりのある親友という関係を築く能力を持っている。  
と記している。



散歩コースで堪能したカワセミ。  
200ミリでもこの大きさが撮れた。

面白い事例がいくつも示されている。たとえばコーラスを楽しむ鳥（ムネアカヒワ）。

「1羽が歌い始める。その3声目あたりで別の鳥が加わる。他の鳥たちも次々と入ってくる。おそらく6羽がその合唱に加わる。別の一群が、そのヒワたちの樹に向かって飛んでくるのが見える。二つの群れは次第に互いの歌を合体させる。このコーラスは遠方にまで届き、ずっと遠くの野原で餌をついばんでいる他の群れを扇動する。まもなく、その群れが大挙して押し寄せ、丸裸になった樹の枝という枝に、ムネアカヒワが鈴なりとなり、全員がフォルティッシモで鳴くのだ」

鳥たちが音声を連続的に紡ぎ出す能力は人間の10倍という。「縄張り宣言」とだけ思っていた鳥のさえずりも、その録音を本来の速度の2分の1から64分の1で再生して初めて、鳥の歌の複雑な変化や素晴らしさが人間にわかるそうだ。

人とのつきあいでは、アレックスと名づけられた16歳のアフリカ産灰色オウムが登場する。1から6までの数字を正しく使い、緑、赤、青、黄など7色を識別、水、ぶどう、 pasta、シャワー、積み木、肩など100以上の言葉と事物がわかり、飼い主に「くすぐって」とか「ポップコーンがほしい」と甘えたという。

そういえば中西悟堂の「野鳥記」には、ヨシゴイやチュウサギ、オナガ、ムクドリ、アカゲラなどと、自宅の居間で親子のように暮らした写真と記述があった。

人間と鳥の付き合い方は双眼鏡やフィールドスコープでひっそり覗いて満足する以前に、本来なら、もっと親密な関係を築けていたのかもしれない。そんなことを想像する

だけで楽しくなる。

定年とともに小堀師匠、札幌のトリ仲間と別れ、3年前から東京・武蔵野暮らしとなった。この4月からは日本野鳥の会東京支部の会員となり、週末に各地で催される探鳥会に参加する一方、日課にしている小金井公園や井の頭公園まで約1万歩の散歩途中で目にする鳥を楽しんでいる。

公園では季節に応じてムクドリ、コゲラ、ジョウビタキ、ルリビタキ、トラツグミ、オナガ、カワラヒワ、エナガ、池ではキンクロハジロ、オナガガモ、オシドリなどが観察できる。時々、望遠レンズの放列ができていて、レンズの先を見るとモデルは決まってカワセミ。私の散歩コースにも団地の水辺に秘密のカワセミ飛来地があり、誰にも邪魔されず堪能していたのだが、エサが少なかったせいか、今年は飛んでこなかった。

野鳥の会の探鳥会では、三番瀬、谷津干潟、葛西臨海公園、東京港野鳥公園など海浜の鳥を尋ねることが多い。参加者は毎回、40人ほど。大半が60代以上で婦人のウォッチャーも多い。北海道の探鳥会との違いは、多くの場合、鳥を遠くにしか見られないこと。10倍の双眼鏡ではとても確認できず、フィールドスコープ持参組が多い。それでも8月には三番瀬の空を舞う2千羽ものコアジサシの渡りの群れを双眼鏡で確認、興奮した。

日暮れて道遠しだが、Birderの静かな喜びを胸にキョロキョロと季節の野鳥を追い求めていくしかない。

#### <小堀の一言>

そんなつもりで原稿を頼んだ覚えはないのに「師匠」などと書かれて冷や汗をかきました。中島君たちと鳥を見るようになったのは彼の言うとおりの、酒の席でのたわ言がきっかけです。当時から私は日本野鳥の会や愛護会の会員だったので、つい鳥のことが口から出たのでしょう、皆、怪訝な顔で私をみている、この飲兵衛が鳥など知っているはずがない、と思ったのでしょうか。私もむきになり次の日の鳥見を約束してしまったのです。次の日は皆、二日酔い状態です。はじめて鳥を見る人たち、しかも酔眼もうろう、私のような普通のバードウォッチャーでも名人に見えたのでしょうか。同期の何人かは真面目に鳥を見るようになりました。

その後、中島君は論説委員としてコラム「卓上四季」を書くようになり野鳥や植物のことを随分取り上げてくれました。それまでの新聞は花鳥風月を軽んじる傾向があり、ずいぶん間違った記事もありましたが、その頃から少しずつ紙面が変わってきたような気がします。飲兵衛のたわ言も少しは役に立ったのでしょうか。

## 北海道におけるカワウの分布拡大

NPO法人バードリサーチ 加藤 ななえ

### これまでのカワウの分布

カワウ *Phalacrocorax carbo hanedae* の日本での分布は、これまでは本州以南とされてきた。日本鳥類目録改訂第6版(2000年)にも、カワウは北海道では迷鳥と記述されている。1923年からの記録が残っている狩猟統計と鳥獣関係統計をみると、北海道では1946年まで「ウ類」が毎年500羽から2,400羽ほど狩猟されていた。ここではウミウやカワウなどが「ウ類」として一緒にカウントされており、北海道の場合の「ウ類」はウミウであろうと考えられてきた。しかし、1970年代に入り、1羽から数羽ではあるが、カワウの名で記されている観察記録がたまに見られるようになってきた。

北海道から近い場所にあるカワウの集団生息地としては、青森県平川市(旧南津軽郡)にある猿賀神社が古くから知られている。ここは1935年にカワウのコロニー(繁殖地)として国の天然記念物の指定を受けたが、1970年ごろには消滅した。このころカワウは全国で3,000羽にまで減少しており、絶滅が心配されていた時期でもある。その後、1980年代に入り下北半島にある隣接する二つの沼にコロニーが見つかった。そこでは現在も多いときには2,000羽ほどが夏季に生息し、また約100羽が越冬することが観察されている(阿部誠一 2005)。一方、大陸方面は、1970年代に中国とロシアの国境にあるハンカ湖で約40巣の営巣が報告されているが、カワウに関する情報は少ない。

カワウの一日の行動圏は20kmから50kmくらいといわれている。2002年に行なわれた衛星追跡では、茨城県の霞ヶ浦から静岡県の浜名湖までのおよそ300kmを4~5時間で移動した例もある(環境省 2004)。そのようなことから、下北半島のコロニーから渡島半島までおよそ60kmなので、カワウにとっては十分に渡ることが可能な距離であろうと考えられていた。しかし、ねぐらの発見の知らせが北海道から届くことはなく、日本のカワウの生息域の最北端は下北半島とされてきた。

### カワウの群れの確認、そして繁殖開始

1999年4月に、石狩川と篠津川合流点で約100羽の群れの観察が報告された(樋口ら 2000)のに続き、同年8月には、そこから200kmも離れた道北の幌延町にある天塩川の河畔林で約20羽の群れのねぐらが確認された(富士元寿彦氏 私信)。石狩川岸辺のヤナギの河畔林にいたカワウの群れは夏になる前にはいなくなりましたが、幌延町のねぐらは秋まで継続して使われており、10月には60羽以上がカウントされた。

2001年には、北海道における初めてのカワウの営巣確認が、上述の幌延町天塩川河畔林と七飯町にある大沼公園のジュンサイ沼との2箇所から知らされた。幌延町のコロニーは、2001年の6巣から2002年には約100巣、2003年には約200巣と急激にその数を増加させてきている(富士元氏 私信)。図1は、2004年6月の営巣の様子である。七飯町のコロニーは2001年には10巣(バードリサーチ調査 未発表)、2004年には12もしくは13巣(バードリサーチ調査 未発表)が観察されている。300kmほど離れたこの2箇所では今も継続して営巣が確認されている。しかし、調査をしづらい場所にあるようで、個体数や営巣数の変化などの基本的な調査はまだ行われてはいない。

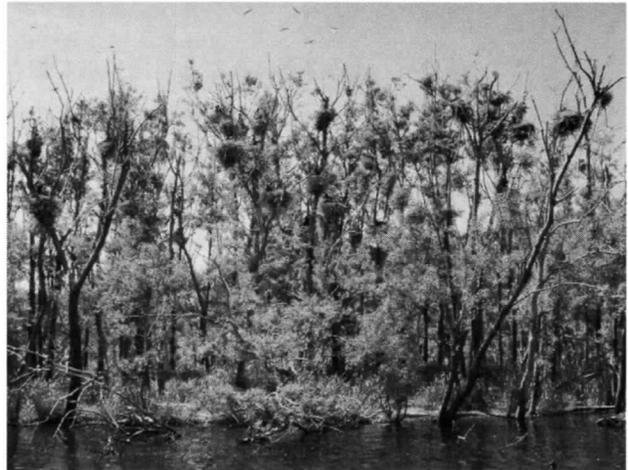


図1 幌延町のコロニー

### 記録の掘り起こし

このように局地的ではあるにしろ、カワウの繁殖が継続して確認されている一方、他の地域でのカワウの目撃情報は、探鳥会記録などにたまに数羽見られるだけで、ほとんど伝わっては来なかった。日本野鳥の会北海道ブロック協議会は、2005年12月までの目撃情報をアンケートと文献で調査し、観察地点の分布を10×10kmの方形区で表してまとめた(日本野鳥の会北海道ブロック協議会 2007年)。これにより、2つのコロニーのほかに、網走、根室、十勝、日高等の地域にもカワウの観察記録があることが分かった。

2007年にはバードリサーチが全国のねぐら調査の一環として北海道での聞き取りも行い、確実にカワウのねぐらがある場所として、天塩川中流域の夏季ねぐら(磯清志 2007)と、十勝川下流の秋季ねぐら(千嶋淳 2007)の情報を得ることができた。天塩川中流域(名寄大橋下流)で

はヤナギの河畔林が利用されており、2005年から数十羽から140羽が夏季に観察されている。十勝川下流では2006年、2007年に400~500羽とかなり個体数の多いねぐらが、やはりヤナギの河畔林に9月から11月にかけて成立していることがわかった。

それぞれの地域の情報が整理されるようになってきて、北海道におけるカワウの分布がかなり広い範囲に及んでいることが見えてきた(図2)。

### これからのこと

1980年代以降のカワウの個体数と分布の回復に伴い、放流魚の捕食や樹木枯死などの被害問題が本州以南の各地で発生してきた。対応には、被害の内容や量とともに、カワウの生息状況の把握が必要になる。カワウ広域協議会を発足させた関東および中部近畿の各都府県では、それぞれのねぐらごとに、カワウの生息状況や植生の変化、被害や被害対策の内容などを盛り込んだ「ねぐら・コロニー情報シート」を作成している。北海道の漁業形態やカワウの生息時期などはほかの地域とは異なるが、もしも被害問題の発生が危惧されるならば、早いうちにカワウの生息状況を共有できるような体制が作られることが望ましい。

とはいえ、これまで記録のなかった北海道でのカワウの分布拡大の確認は、それだけでも興味深い。かれらはどこからやってきたのだろうか。本州から北上してきたのか、それとも、大陸からやってきた可能性はあるのか。カワウの羽から遺伝的構造を調べ個体ごとのグループへの帰属の確率を研究した長谷川理さんたちによると、日本のカワウは、関東地方と中部以西および青森・大分の3つのグループに分けられた(長谷川ら 2007)。北海道は、ここではなぜか中部以西のグループに属する個体が多いことが示されていた。この分野の研究はこれからもどんどん進化していくだろう。期待される。カワウの移動を調べるために、衛星追跡のほか、関東と中部近畿にあるコロニーで研究者たちによる標識調査も行われている。カラーリングの足環をつけたカワウが北海道で見つかることもあるかもしれないので、足にも注目してほしい。

今年の10月に北大で開かれた集会で、カワウの分布について発表をした折、数人の参加者から新しい情報が寄せられた。カワウの観察記録を個人で持っている人は、結構いるのかもしれない。このような情報を集めて共有できるような、簡便なシステムを作りたいと考えている。

### カワウの情報をお願いします

カワウの観察記録を私または北海道野鳥愛護会の樋口孝城さんへお知らせください。



図2 カワウの分布。●はコロニー、▲はねぐら。灰色の楕円形内はカワウの観察例が多い地域

送ってほしい情報：観察の場所と日時、カワウの数と行動の記録、足環の記録など

連絡先：〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9  
 バードリサーチ 加藤ななえ  
 E-mail: kato@bird-research.jp

〒002-8065 札幌市北区拓北5条2丁目10-17  
 樋口 孝城  
 E-mail: higuchi@hoku-iryu-u.ac.jp

### 引用文献

- 阿部誠一. 2005. 平成16年度・平成17年度カワウ生息調査. むつ市文化財調査報告第34集: 117-124.
- 千嶋 淳. 2007. 十勝川下流の集団ねぐらにおけるカワウの個体数. 十勝野鳥だより161号: 14-15.
- 長谷川理・石垣麻美子・福田道雄・新妻靖章・東 正剛. 2007. 急激な分布拡大の過程で、カワウの遺伝的構造はどう形成されたか? (発表要旨). 日本鳥学会2007年度大会講演要旨集. 123.
- 樋口孝城・広川淳子・新城 久. 2000. 北海道におけるカワウの群れの初記録. Strix 18: 149-152.
- 磯 清志. 2007. 天塩川中流域におけるカワウの記録. 北海道野鳥だより150: 11-12.
- 環境省自然環境局. 2004. 特定鳥獣保護管理計画技術マニュアル(カワウ編). : 103-104.
- 日本鳥学会. 2000. 日本鳥類目録改訂第6版
- 日本野鳥の会北海道ブロック協議会. 2007. 北海道におけるカワウとミヤマガラスの最近の生息状況. Strix 25: 109-117.

## 絶滅危惧種シマアオジをどう守るか (1)

# 減少の実態

北海道環境科学研究センター-自然環境部 玉田 克巳

2008年6月、道東の小清水原生花園をたずねたとき、衝撃的な解説版を目にした。「シマアオジ・・・激滅の理由は不明で、個体数回復の有効な手だてについてもまだわかっていない」と書かれていた。「RDB準絶滅危惧種」とあったから、解説版自体は少し古い情報であるが、有効な手だてが見つからないことは今でも変わっていない。野鳥観察に関心のある方たちの間では、シマアオジの減少を心配している方は多いと思う。しかし、社会全体で見たとき、この問題に対する世論はあまり高いとは感じられない。数少ないトピック的な事柄があっても、マスコミ各社の取り上げ方は決して大きくない。しかし事態はとても深刻である。せめて、現在わかっていることだけでも、この場を借りて数回に分けて紹介したい。

減少の実態をはじめ科学的に明らかにしたのは、根室市春国岱の事例を中心に報告した川崎ら(1997)の論文である。当時、根室市春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターのレンジャーだった川崎さんたちは、シマアオジの減少をとっても心配されており、野鳥公園構想のために行われた1983年の調査結果と比較する形で、1995年と1996年に同様な調査を実施し、鳥相の変化をデータで示した。また春国岱のほかにも、未発表データとして走古丹や野付半島の結果なども付記してシマアオジの減少を明らかにしている。川崎さんが調査を行っていたころ、私は根室支庁の自然保護行政の担当者であった。ネイチャーセンターにもよく顔を出し、川崎さんたちには、公私にわたってずいぶんとお世話になった。しかし、本当に減少しているのかどうか、実態さえ明らかになっていなかった当時、川崎さんたちの抱いていた危惧を仕事に反映させることはできなかった。いつか必ず、この問題を真正面から取り組みたいと強く念じていた。

シマアオジの減少実態が全道レベルで明らかになったのは、環境省の委託を受けて日本野鳥の会が実施した自然環境保全基礎調査の結果が明らかになってからである(環境省自然環境局生物多様性センター 2004a)。調査は支部会員の協力によって行われたもので、シマアオジの結果は野鳥誌にも紹介されているので、ご存知の方も多いと思う。この調査は、現地調査と資料や聞き取りによって得られたアンケート調査との組合せである。現地調査は国土地理院の5万分の1の地形図内に約3kmの調査コースを2ヶ所設定し、ラインセンサスと定点調査が行われている。1回目の調査は1974~1978年に行われ、1997~2002年に2回目の調査が行われた。調査結果は、5万分の1の地形図の区画で公表されている。これによれば、1974~1978年には52地点の生息情報があったが、1997~2002年には15地点のみ

であった。地点数だけを比較すれば、実に71%の減少である(図1)。

同様の調査結果がある。これも環境省の自然環境保全基礎調査の中で行われたものであるが、北海道庁が委託を受け、北海道環境科学研究センターが中心となって行ったものである(環境省自然環境局生物多様性センター 2004b)。道や国などがさまざまな調査で、1974~1985年に行ってきた草原性鳥類を対象に行われたラインセンサスの調査結果を27ヶ所探し出し、2002~2003年に同じ場所で、5回(一部6回)の追試を行った。この結果、1974~1985年には23ヶ所で生息が確認されていたシマアオジが、2002~2003年には5ヶ所でしか確認されなかった。地点数の比較では、実に78%の減少ということになる。2002~2003年の調査は、5月下旬から7月上旬まで、旬別に約10日ごとに5期に区切り、2年間で各期に1回ずつ、合計5回の調査を行った(クッチャロ湖の3ルートだけは、過去の調査が7月下旬に行われたため、上述の5回に、7月下旬の調査を加えて6回とした)。確認地点数の減少が直ちに個体数の減少状況を正確に反映しているということではない。確認地点数の比較では、1羽でも確認されれば、その地点で確認されたことになるが、ラインセンサスでは確認された羽数に注目することができる。ところが、小鳥というものは一般的にオスがナワバリを主張する繁殖期の前半に目立ちやすく、ヒナへの給餌を行う繁殖期の後半には目立ちにくくなる。ラインセンサスの確認羽数は、この影響を強く受ける。つまり、繁殖期を通してナワバリ数が同じである調査地でも、時期によって目立ちやすさが変わり、結果としてラインセンサスで確認できる羽数が変わってくる。だから、調査時期を無視して個体数を比較しても、増減を正確に把握しているとは言い難い。1974~1985年の調査は、さまざまな目的(主として、その地域の鳥相把握)で行われたものであるため、調査時期も5月から7月までさまざま、調査回数も1~2回である。そこで、統計学的にも減少していることを明らかにするため、5回行った2002~2003年の調査のうち、1974~1985年の調査と調査時期が近いものを選んで、確認羽数に関する27ヶ所の対のデータを使って比較した。結果は自明で、統計学的にもシマアオジが減少していることが明らかになった。そしてちょっと乱暴な計算も行ってみた。1974~1985年の調査で確認できた個体数を合計すると92羽になる。時期を考慮した対のデータから、2002~2003年の調査の確認羽数を合計すると7羽になる。この数字から減少率を計算すると92%と計算できる。1974~1985年と2002~2003年の調査結果を比較すると、ほとんどの地域で消滅しているが、両調査で確認できている調査地点で

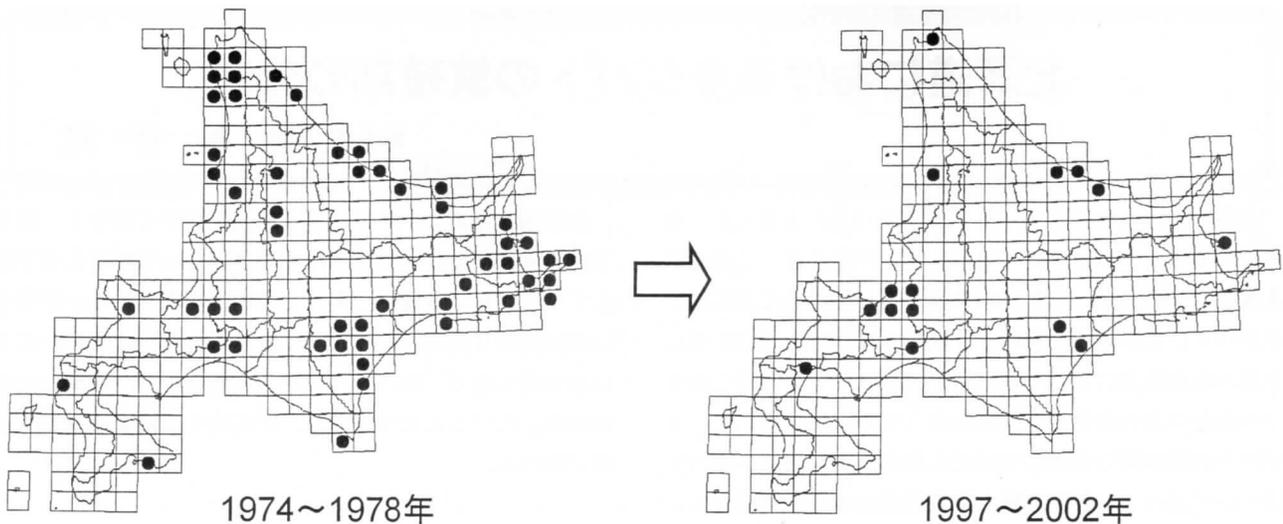


図1. シマアオジの減少実態 環境省自然環境局生物多様性センター (2004a) から作図

も、ほとんどの地域で、確認個体数が減っていた。個体数を考慮した減少率92%という数字は、いささか乱暴な数字ではあるが、消滅地点の7～8割より深刻な数字である。日本野鳥の会が行った調査と北海道環境科学研究センターが行った調査は、ごく一部で調査地が重なっているが、それぞれ別々に行った調査である。この2つの調査から、全道で7～8割の地域で消滅しているという、似通った結果が得られたことは、消滅の実態はこの辺にあると見て良いと思う。そして、この消滅地点数から計算した減少実態は、個体数を考慮していない。個体数を考慮すれば、減少実態はさらに深刻になる可能性がある。だから、減少実態が7～8割という数字は、大げさな数字ではなく、むしろ少し控えめの数字で、この程度は減っていると見ても良いと考えている。

では、シマアオジは一体いつごろから減りはじめたのだろうか？これを証明できるデータがなかなかない。上述の調査についても、過去の結果は1980年代前半までの記録である。この時期にすでに減少が始まっていたのかどうかは定かでない。しかし、危惧するほど減っていたわけでもない。ここで、北海道野鳥愛護会の探鳥会記録を振り返ってみよう。2001年に30周年の記念誌が刊行されており(北海道野鳥愛護会 2001)、探鳥会の記録が詳しく記述されている。シマアオジが確認されているのは、植苗探鳥会、福移探鳥会、東米里探鳥会の3ヶ所である。東米里では1992年、福移では1999年が最後の記録で、植苗では30周年誌でまとめられた1999年まで記録があり、その後の会報から記録を追うと2002年まで記録があるが、2003年以降の確認記録がない。上述の根室市春国岱の調査は1995年時点で確認されておらず、川崎さんはそれより前に減少を危惧して調査を開始したのであるから、春国岱では1990年代前半には減少していたと考えられそうだ。科学的に証明できるデータは、現在も収集中で、なかなか同じ場所で時系列のデータをそろえることはできない状況であるが、長年鳥を見ている方々の話を聞いていると、減少が顕著になったのは

1990年代前半とする意見が多いように思う。

さて、日本野鳥の会と北海道環境科学研究センターが行った追試は、1990年代後半から2000年代前半である。昨春の2008年は、これらの調査から5年以上が経過していることになる。2002～2003年の調査でシマアオジを確認した地点、あるいは聞き取りなどで、当時シマアオジが生息していたという情報のある地域を、2008年の春に訪ねてみた。野付半島と標津湿原では、2003年に生息を確認しており、標津湿原については、給餌と思われるオスの行動も目撃している。しかし、2008年春は個体を確認できなかった。それだけではない。野付半島ネイチャーセンターでは、利用者からの情報も広く集めているが、ここ数年、両地域で生息を確認していないという。この2地域からシマアオジが消滅したと思われる(野付半島では2002年と2003年に2ヶ所で生息を確認していたから、これを分ければ3地域ということになる)。このほか、聞き取り情報等も含めれば、ウトナイ湖北岸、コムケ湖、江別市内も2000年代前半には生息情報があったものの、近年確認情報がない。2000年代前半で、すでに7～8割の地域で消滅していたわけであるが、2008年の調査で、定量こそできないが、状況がさらに悪化していることが明らかになっている。

## 文献

- 川崎慎二・加藤和明・樋口広芳・高田令子(1997)北海道東部・春国岱の繁殖期の鳥類相の変化. *Strix* 15:25-38.
- 環境省自然環境局生物多様性センター(2004a)鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 環境省自然環境局生物多様性センター(2004b)生態系多様性地域調査(湿原生態系調査)報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田.
- 北海道野鳥愛護会(2001)私たちの探鳥会. 北海道野鳥愛護会, 札幌.

## 北海道におけるキジバトの繁殖期の分布

美唄市 藤 卷 裕 蔵

人為的に導入されたドバト（カワラバト）を除くと、北海道にはキジバトとアオバトの2種が生息する。これらは北海道では夏鳥で、樹上に巣を造る森林性の鳥であるが、キジバトは農耕地など開けた環境でも採餌するなどこれら2種の生息状況にはかなり違いが見られる。今回はこれまでの自分の調査結果と各種報告書などの記録を用いて、キジバトの繁殖期の分布についてまとめた。次回はアオバトについて述べ、これら2種の生息状況について比較する。

調査方法、使用したデータ、まとめ方については、カケス（121号）やコムクドリ（130号）の場合と同じなので省略する。2007年までに調査した区画（5×5 km）の数は784、調査路数は882である。分布については全てのデータを用いたが、生息環境別と標高別の出現率については上記の区画と調査路で調べた結果だけを用いた。

### 分 布

図1に、10km四方の区画を単位として繁殖期のキジバトの分布を示した（観察結果は5×5 kmの区画で記録しているが、図が細かくなるので10km四方で表示）。

分布図を見ると、キジバトは山間部だけではなく、石狩平野や十勝平野など農耕地や住宅地の多い平野部にも生息していて、ほぼ全域に分布しているが、森林のない海岸沿いの区画や日高山脈の稜線部にあたる区画では記録されていない所もあり、高山にはほとんど生息していないことがわかる。このことについては、標高別の出現率の項で具体的に述べる。

### 生息環境

生息環境別に出現率（全調査路数に対するキジバトが観察された調査路数の割合）をみると、キジバトはハイマツ帯では18%と少ないが出現しており、常緑針葉樹林で78%、針広混交林で66%、落葉広葉樹林で81%、カラマツ人工林で91%で、針広混交林でやや低く（表1）、森林のタイプによって出現率が異なっていた。また、調査路2 km当たり幅片側25mの範囲で数えられた平均個体数は、常緑針葉樹林で0.4羽、針広混交林で0.2羽、落葉広葉樹林とカラマツ人工林で0.5羽であった。観察頻度が高い割りに個体数が少ないのは、キジバトが小鳥類のように調査路の25m以内



図1. 北海道におけるキジバトの繁殖期の分布。

一つの区画は約10km四方で、1/25,000の地形図に相当する。

●=生息が確認された。○=調査したが観察されなかった。·=未調査。

で観察されることが少ないためである。

キジバトは森林以外の環境でもかなり観察され、出現率は農耕地・林で94%、農耕地で89%と高く、住宅地でも27%であった(表1)。キジバトは樹上に巣を造るので、樹木のある環境を必要とするが、畑のように開けた環境でもよく採餌するので、農耕地でも出現率が高くなるのであろう。

標高別の出現率については、出現率の低かったハイマツ林と住宅地以外の環境についてみることにする。出現率は、200m以下では92%、201~400mで82%、401~600mで67%、601~800mで46%、801m~では26%で、標高が高くなるにしたがって低くなる。標高400m以下では出現率が

表1. キジバトの生息環境別・標高別の出現率(%)

生息環境	調査 路数	標高(m)					全 体
		~200	201~400	401~600	601~800	801~	
ハイマツ林	12	—	—	—	0	18	18
常緑針葉樹林	18	90	67	100	67	67	78
針広混交林	154	82	81	63	45	27	66
落葉広葉樹林	185	91	79	65	0	0	81
カラマツ人工林	23	100	82	100	—	—	91
農耕地・林	223	97	86	71	100	—	94
農耕地	260	89	85	100	—	—	89
住宅地	33	23	100	50	—	—	27

82%以上なので、普通に生息しているといつてよく、キジバトは低山帯の鳥である。

まとめると、キジバトは北海道全域にほぼ一様に分布しており、森林の鳥であるが農耕地のような開けた環境にも生息し、おもに標高400m以下の低山帯のポピュラーな鳥である。

## 鳴き声で北海道の野鳥を識別する試み

札幌市厚別区 田 辺 至

### まえがき

散歩しながら野鳥のさえずりに耳を澄ますが、声はすれども姿は見えぬ。こんな時、鳴き声から名前が分かたらすばらしいと思いませんか。初心者でも鳴き声から名前を探せるように、「鳴き声で鳥の名前を探す検索表」(北海道の野鳥120種の鳴き声の録音テープ・MD付、1時間13分)を試作しました。

### 1 「鳴き声で鳥の名前を探す検索表」の構成

北海道の野鳥の鳴き声を次の3点を拠り所にして分類し、検索表を作りました。

I 生息場所：森、水辺と草原(川岸・林縁)、市街地

II 鳴く季節：冬から早春、春・夏・秋

III 鳴き声の質：細い高い声、太い低い声、その他の声

これまでに北海道で記録のある野鳥は約450種ということですが、この中には稀少種もあり、私達が北海道で普通に見かける鳥は約180種といわれています。今回の検索表の付属として作った録音テープ(MD)の音源には、私が録音した120種の野鳥の鳴き声を使いました。その内容は、鳥の鳴き声(1種平均25秒間)とアナウンスが長々と続く退屈なものです。鳥の声に癒しを求め人や、鳥の識別に関心のない人には向いていません。

### 2 「鳴き声で鳥の名前を探す検索表」

表1をご覧下さい。

### 3 「鳴き声で鳥の名前を探す検索表」の使い方

- (1) 初めに、その日の散歩のコースに合わせて、この表の「森の鳥」、「水辺・草原(川岸・林縁)の鳥」、「市街地の鳥」のどれかを選びます。
- (2) 次に、散歩の途中で、今聞いている野鳥の声の質が「A 細い高い声」か、「B 太い低い声」か、「C その他の声」か判断します。この判断の基準はありません。皆さんの判断におまかせします。
- (3) 今の季節を「1. 冬から早春(11月から翌年4月中旬)」と「2. 春・夏・秋(4月下旬から10月末日)」から選びます(季節の区分は北海道のもので、本州とは少し違います)。
- (4) 例えば、野幌森林公園(森)で、細い高い声で、ツツピー、ツーピーという鳴き声を4月上旬に聞いたとします。そこで、この検索表を使い、「森の鳥」→「A 細い高い声」→4月上旬ですから「A1 冬から早春」を選べると、その右側の欄に、可能性の高い鳥の名前が16種のついています。この中に今鳴いている鳥の名前が1つあります。
- (5) そこで持ってきたテープレコーダーを回し、付属の録音テープの1. シジュウカラを再生してみると、イヤホンからそっくりなツツピー、ツーピーという声の流れ、あの声はシジュウカラだと分かります。シジュウカラでなかったら、録音テープを2. ハシブトガラ、3. コガラ……と順次再生して、森の鳥の声16種の中から探します。

表1 鳴き声で鳥の名前を探す検索表

	声の質	さえずりの季節 (一部に地鳴きも入る)	可能性の高い鳥
森 の 鳥	A 細い高い声 (ソプラノ級)	A1 冬から早春 (11月から翌年4月中旬)	1. シジュウカラ 2. ハシブトガラ 3. コガラ 4. ゴジュウカラ 5. ヤマガラ 6. ヒガラ 7. ヒレンジャク 8. キレンジャク 9. ウソ 10. キクイタダキ 11. キバシリ 12. マヒワ 13. シメ 14. ミソサザイ 15. ジョウビタキ 16. カシラダカ
		A2 春・夏・秋 (4月下旬から10月下旬)	17. カワラヒワ 18. ホオジロ 19. メジロ 20. アオジ 21. ニュウナイ スズメ 22. キビタキ 23. オオルリ 24. コルリ 25. エゾムシクイ 26. ベニマシコ 27. ピンズイ
	B 太い低い声 (バス級)	B1 冬から早春	28. コゲラ 29. カケス (鳴きまねの内容: ウグイス、ネコ、イヌ、ハシブトガラス、ハシボソガラス、クマゲラ、フィー?) 30. アトリ 31. エナガ
		B2 春・夏・秋	32. キジバト 33. ムクドリ 34. ツツドリ 35. ジュウイチ 36. メボソムシクイ (亜種コメボソムシクイ) 37. モズ (鳴きまねの内容: ウグイス、ヒバリ、カワラヒワ、ハシブトガラ) 38. アカモズ 39. ホシガラス
	C その他の声 (テノール・アルト級)	C1 冬から早春	40. アカゲラ 41. クマゲラ 42. ヤマゲラ 43. オオアカゲラ 44. アリスイ 45. コアカゲラ 46. ツグミ 47. イスカ
		C2 春・夏・秋	48. センダイムシクイ 49. アカハラ 50. アオバト 51. イカル 52. クロツグミ (鳴きまねの内容: 他の鳥の鳴き声を編曲してまねる。モズやカケスのように忠実にまねることはしない。) 53. コムクドリ 54. ルリビタキ 55. アカショウビン 56. チョウゲンボウ 57. オオタカ 58. チゴハヤブサ 59. ハチクマ 60. コウライキジ [夜の森に響く声] 61. マミジロ 62. トラツグミ 63. ヨタカ 64. フクロウ 65. アオバズク 66. コノハズク 67. トラフズク
水辺・草原 (川岸・林縁) の 鳥	A 細い高い声 (ソプラノ級)	A1 冬から早春	68. ハクセキレイ 69. キセキレイ 70. セグロセキレイ
		A2 春・夏・秋	71. カワセミ 72. カイツブリ 73. ミミカイツブリ 74. コガモ 75. ヒドリガモ 76. キンクロハジロ [草原のコーラス] 77. シマアオジ 78. ノゴマ 79. ノビタキ 80. ホオアカ 81. マキノセンニュウ 82. シマセンニュウ 83. コヨシキリ 84. イソシギ 85. ツルシギ
	B 太い低い声 (バス級)	B1 冬から早春	86. オオヒシクイ 87. オオワシ
		B2 春・夏・秋	88. マガモ 89. カルガモ 90. オオヨシキリ 91. オオジシギ 92. オオジュリン 93. ショウドウツバメ 94. アオサギ 95. ゴイサギ 96. カラシラサギ (平成9年8月に美唄市宮島沼で1週間録音したが、これだけしか鳴かなかった)
	C その他の声 (テノール・アルト級)	C1 冬から早春	97. マガン (宮島沼から早朝の飛び立ち) 98. カリガネ 99. タゲリ 100. オナガガモ 101. ハシビロガモ 119. オオハクチョウ 120. コハクチョウ
		C2 春・夏・秋	102. アオアシシギ 103. オグロシギ 104. タカブシギ 105. セイタカシギ 106. ホウロクシギ 107. オオソリハシシギ 108. パン 109. オオバン 110. コチドリ 111. エゾセンニュウ 112. スズガモ (メスだけの声)
市街地の鳥		113. ハシボソガラス 114. ハシブトガラス 115. ドバト 116. オオセグロカモメ (札幌市中島公園) 117. ヒヨドリ 118. イワツバメ (札幌市豊平川にかかる橋) 秋から冬になると、町内の並木ではカラ類が見られ、春にはカワラヒワ、キジバト、アトリ、カケスを見かける。	
○周知のスズメ、トビ、カッコウ、タンチョウ、ヒバリ、ウグイスの声は省略			

- (6) MDプレーヤーをお持ちの方は更に楽です。MDプレーヤーのリモコンの液晶画面にこの検索表の鳥の番号を出し、ボタンを押すとすぐにその鳥の鳴き声が聞こえます(テープレコーダーではこの操作はできません)。

#### 4 この検索表の限界

- (1) この検索表は1年の中の短い「繁殖期」のさえずりで鳥の名前を探そうとしています(一部の鳥は地鳴きでも探せます)。多くの野鳥は繁殖期を過ぎると、チツとかチーとか、互いによく似た地鳴きという声になり、鳴き声での識別は難しくなります。この検索表はさえずりの聞かれる繁殖期に利用して下さい。それ以外の季節では利用困難になります。
- (2) この検索表で扱っている野鳥は、私の録音した120種だけです。野鳥全種の鳴き声には対応しきれません。鳴き声で探せない鳥も出てきます。その折は悪しからず御了承下さい。
- (3) 鳥の鳴き声は変化に富み、季節(地鳴きとさえずり)や他の鳥との関連で警戒、威嚇等いろいろな声を出します。限られたこの録音テープ(MD)に納めきれなかった声を出して、名前を探せないこともあります。
- (4) 翼のある鳥のことで、この表の区分け通りの生息場所にいるとは限りません。その場合は探すのに時間がかかります。

野鳥の識別の基本は姿の観察です。鳴き声で軽々しく判断すると失敗します。しかし、鳴き声を聞いてその主の名前を知りたいと思う気持ちにこたえようと、出来る範囲で工夫したのがこの検索表と録音テープ(MD)です。皆様の御批評と御感想を戴きたく思います。

入手ご希望の方はテープかMDかを示して下記までご一報ください。

004-0041

札幌市厚別区大谷地東5丁目14-1-107号

田辺 至

#### 5 野鳥の声の収録地

北海道美瑛市の森・草原・沼(宮島沼等)で、この検索表の野鳥120種のうち107種を収録しました。その他、ニセコ周辺、十勝岳周辺、積丹半島、支笏湖、道民の森等で収録しました。

#### 6 参考資料など

- (1) 上田秀雄(録音)・叶内拓哉(写真)「声が聞こえる!野鳥図鑑」(文一総合出版、1,680円)  
日本唯一の音の出る図鑑。200種の野鳥の鳴き声をスキャ

ンコード(バーコード)として印刷し、専用のコード読取機のサウンドリーダー(8,900円)でなぞると、鳴き声が聞かれます。

なお、日本野鳥の会では、手持ちの音の出ない野鳥図鑑に、野鳥の声を印刷したシールを貼って、バードボイスペン(シールとセットで税込13,965円)を当てるだけで、その声が聞かれる装置を販売しています。

- (2) 松田道生「野鳥を録(と)る」(東洋館出版社、平成16年発行、2,940円)

基礎から学べる録音技術や録音機材の選択から、高度なパソコンを使った編集やCDの制作まで、最新の技術を取り入れた詳しい説明書。鳴き声による識別の秘訣や鳴き声を覚えるコツにも触れています。これ以外に類書はありません。

- (3) 田辺 至 録音(カセットテープ・MD)

(イ) 「北海道のキツツキ7種のドラミングと鳴き声」  
(15分間)

(ロ) 「北海道のカラ類その他の地鳴きとさえずり」  
(15分間)

(ハ) 「快眠への招待」(入眠剤より効く、野鳥のさえずり・自然の音)  
(56分間)

- (4) ITを使った未来の野鳥図鑑

報道によると、研究者は鳥の鳴き声に反応し、その鳴き声を自動識別して鳥の名を知らせるシステムを開発中で、将来、鳴き声による自動検索機能を持ったフィールド図鑑が出来るとも知れません。その形や機能は今の携帯電話のようで、鳴き声を自動検索すると、液晶画面に鳥の名と姿の立体画像が出てくるかも知れません。

#### あとがき

北海道野鳥愛護会の皆様には、カラスとスズメ位しか分からなかった私に、親切な探鳥の手ほどきをしていただき、また、貴重な情報の提供や、車を持たぬ私を乗せて下さったり、大変お世話になりました。心から感謝申し上げます。

#### [編集部より]

北海道新聞野生生物基金による北海道野鳥データベース(<http://jyoho.hokkaido-np.co.jp/wildbird/>)に収録されている野鳥の中には田辺さんが録音された鳴き声を聞くことができるものもあります。五十音順または科別の収録野鳥一覧から目当ての鳥を選ぶと、その鳥の写真と簡単なデータの画面になります。「声」の欄に[鳴き声を聞く]という表示があるものについて、MP3ファイルという表示をクリックすると鳴き声が流れてきます。現在ではほとんどのPCでその機能がありますが、もし流れてこない場合には、詳しい人にお尋ね下さい。

## 山階鳥類研究所紹介

(財) 山階鳥類研究所広報室長 平岡 考

財団法人山階鳥類研究所(以下、山階鳥研)は千葉県我孫子市にある鳥類専門の研究所です。公立の施設という誤解をされていることがありますが、民間団体です。所員は2008年11月現在20名、そのうち16名が研究員です。

山階鳥研の創立者、山階芳麿博士(1900-1989)は昭和天皇のいとこにあたる皇族で、鳥類学者です。東アジア産鳥類の分類を形態学的に行って大著「日本の鳥類と其の生態」(1・2巻)をまとめたほか、客観的な分類学を目指して細胞学的な分類法を研究し成果を挙げました。山階博士は、1932年に自身の研究のために収集した標本や図書を収蔵する鳥類標本館を建設しましたが、収集した資料を社会に役立ててもらおうと考え、1942年に文部省の認可を受けてこれを財団法人山階鳥類研究所としたものです。

### 鳥類標本

山階鳥研の大きな特徴に質量ともに日本一の研究用鳥類標本を所蔵していることが挙げられます。標本は剥製標本、骨格・巣・卵・液漬標本など約6万9千点に及びますが、この数は、所蔵数の第2位から6位までの総数を合計した数よりも多いだんとつの第1位です。

所蔵標本の大部分を占めるのは研究用の剥製標本です。剥製という博物館の展示などにある生きた姿を模したものを思い浮かべられる方が多いでしょうが、研究用の剥製はまっすぐな棒のように作られたものです。研究用の剥製は、山階博士が自身の分類学研究のために収集したものを中心に、購入、交換、寄贈等により集められたものが加わっており、世界中の標本がありますが、充実しているのは日本、千島列島、サハリン、朝鮮半島、中国東北部、台湾、ミクロネシアなどです。

標本は山階博士の時代は、銃で撃つなどして収集したわけですが、現代では標本だけのために生きた鳥を採集することはまれで、現在山階鳥研で新しく作っている標本の材

料は、バードウォッチャーその他の方が拾得された斃死鳥を譲り受けたり、動物園で死んだ鳥を譲り受けたりしたものがほとんどです。近年では後で述べるようにこういった標本材料からDNA分析用の組織サンプルも採取し保存しています。

標本は単に保存しているばかりではなく、積極的に研究に活用することが必要です。しかし、点数が多いことや、戦後長く財政の苦しい時代が続いていたことなどから、所蔵標本全体の台帳が整備されておらず、利用の便は決してよくありませんでした。このため、パソコンを利用した標本データベースの作成を進めてきており、現在インターネット上での公開を目指して最後の作業を行っています。

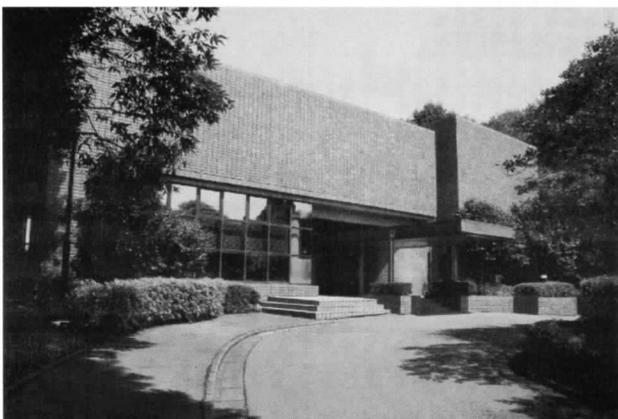
### 鳥類関係図書

山階鳥研の図書は、山階博士の蔵書に加えて、その後、寄贈を受けたり購入・交換等で収集したものがあり、その数はおよそ3万9千冊に及んでいます。イギリス鳥学会の学術雑誌Ibis誌、アメリカ鳥学会のAuk誌などが100年以上前の創刊当初からはほぼ全て揃っている図書室は日本ではここだけでしょう。また、国内の野鳥関係団体の会報をご寄贈いただいている例も多く、各地の鳥の状況に関する有用な情報源になっています。「北海道野鳥だより」もおかげさまで創刊当初から揃っています。標本と同じく図書についてもデータベース化の作業を進めています。

### 標識調査

日本産鳥類のデータ収集として重要なのが鳥の渡りや野外での寿命を調べる鳥類標識調査です。日本産の野鳥がどこまで渡ってゆくかや何年生きるかは、たとえばその種がいくつ卵を産むのかとか、孵化まで何日かかるのか、巣立ちまで何日かかるのか、餌は何を食べるのか等々のことがらと同じく、それぞれの種の生態に関する基礎資料で、そもそもその種が保護すべきほどの減少をしているかどうかとは別に知っておくべきことがらです。そして万一その種が減少したときには、こういった情報をあらかじめ調べてあることが保護のために重要な意味を持つのです。

渡り鳥がどこまで渡ってゆくかを調べるには、特に小型の鳥では技術の進歩した現代でも鳥にしるしを付けるしか方法がありません。また野外での寿命を知るには体の大小に関係なくしるしを付けるしか方法がありません。鳥類標識調査は、この、しるしを付けることを系統立って行うために、一個一個異なる番号のついた足環を装着するものです。個体ごとに異なった番号の足環を装着することによって、次に捕獲されたり、死んで拾われたりしたときに、どこからどこまで移動したかがわかり、また何年生きたかわかります。



山階鳥類研究所の外観



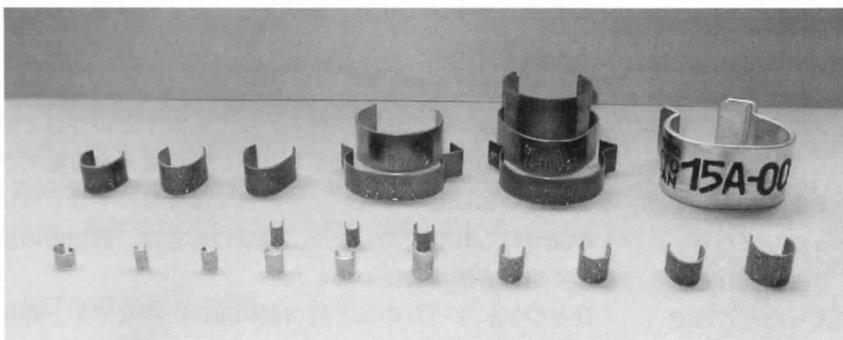
研究用剥製を納めた標本室

標識調査は全国で約450名の協力調査員がボランティアで従事しています。山階鳥研で実地のトレーニングや関係法令の講習を受け、鳥を安全に捕獲し、識別し、足環を装着して放鳥することができる人と認められた人に、環境省の許可を得て標識調査を行っていただいています。

現在、標識調査は環境省の委託事業として行われており、協力調査員や多くの関係者の長年の努力によって、鳥の渡りや寿命について様々の知見が得られ、報告書等にまとめられています。それらの結果は、近隣諸国とのあいだで締結されている渡り鳥条約の改訂に反映されるなど、保護施策の策定に活用されています。代表的な渡り鳥についての調査結果をまとめた「鳥類アトラス」は環境省生物多様性センターのウェブサイトでご覧が可能です。

## DNA研究

山階鳥研では標本材料等から得たDNA採取用の組織サンプルを保存しています。こうして収集したサンプルのう



さまざまな大きさの鳥にあわせて作られた金属製の足環

ち環境省のレッドデータブック掲載種についてミトコンドリアDNAの全塩基配列の決定を行っています。これは希少種の遺伝情報を保全のための基礎的データとして解明しておくという趣旨です。

また、DNAバーコーディングという研究を国立科学博物館ほかと共同で進めています。DNAバーコーディングは、既知の全ての生物についてミトコンドリアDNAの特定の領域の塩基配列を読んでデータベースとしておくことにより、少量の血液や肉片などの微量な試料があれば種の同定ができるようにしようというものです。今までであれば、飛行機のエンジンに巻き込まれてミンチ状になってしまった鳥の同定は不可能だったのですが、今後はミンチの肉片でもこの領域のDNAを読むことにより同定が可能になるわけです（衝突した鳥の種名がわかれば、生態の知見から衝突防止対策が立てやすくなります）。この仕事の特徴は、単にDNAを分析するだけでなく、DNAを取った個体の標本（証拠標本）を対応づけて保存することを義務づけている点にあります。これによりたとえば後から種の同定に疑義が出てきても標本に戻って調査ができるわけです。この仕事は全世界で分担して行われており、日本産鳥類については国立科学博物館を中心に山階鳥研も加わって進めています。

DNAを用いた研究では猛禽類の研究も行っています。おもに拾得した羽毛からDNAを採取するやり方で、日本国内のクマタカとオオタカの遺伝的多様性を調査しました。この結果、遺伝的多様性だけの点からは、クマタカもオオタカも危機的な状況にはないという結果が得られています。もちろん、猛禽類の保全に関しては、野外観察からの情報なども併せて総合的に判断することが必要で、DNAの調査結果だけから安心できるものではありません。

## アホウドリの保護

アホウドリは、明治時代以前には北西太平洋に何百万羽という数が生息していましたが、明治時代に輸出用の羽毛採取のために乱獲され、太平洋戦争後には一時絶滅したと考えられたこともありました。その後再発見された伊豆諸島の鳥島では1992年から山階鳥研が東邦大学の長谷川博さんと共同でデコイ（模型）による新繁殖地形成を開始しました。これは、従来からの繁殖地である燕崎の立地条件が悪く、繁殖成績が良くないために、傾斜がよりなだらかで条件のよい島の反対側の初寝崎に、デコイというプラスチック製のアホウドリの模型を使っておびき寄せようというものです。この「デコイ作戦」は2006年に初寝崎で13羽のヒナが巣立って成功を見ました。

デコイ作戦は成功しましたが、鳥島は火山島であり噴火が起これば島内の新旧の繁殖地とも打撃を受ける可能性があります。また、もうひとつの繁殖地である尖閣諸島は領土問題のため調査も保護活動も困難であ

ることから、次のステップとして明治以前の繁殖地のひとつに再び繁殖地を作らせる「再導入」計画を行うことになりました。再導入先として小笠原諸島鴛島が選ばれ、デコイの設置による誘致にあわせて、鳥島からヒナを移送し、鴛島で人工飼育を行うことになりました。これは、巣立ったヒナが生まれ故郷に戻って繁殖する習性を利用して、ヒナを孵化後なるべく早い時期に鴛島に移送し、人工飼育して巣立たせることで、鴛島を生まれ故郷と思わせるものです。これにより、巣立ち後4～5年たって繁殖期をむかえた際に、鴛島に戻って繁殖するようにさせようというものです。2008年2月に鳥島から鴛島へ10羽のヒナの移送が行われ、山階鳥研の研究者らがキャンプして人工飼育した結果、10羽全てを巣立たせることに成功しました。山階鳥研では環境省とアメリカ合衆国魚類野生生物局と共同で、合計5年間、この移送を続ける予定です。うまくゆけば、だいたい4年後から繁殖年齢に達した個体が鴛島に戻りはじめ、繁殖地を形成することになります。



鴛島に移送されたアホウドリのヒナ (2008年 2月)

### ご支援のお願い

このように山階鳥類研究所では、鳥類に関するさまざまな研究と保護活動を行っています。ここに述べたほかにも、外来生物のマンガースなどによって個体数が急激に減少しつつある沖縄のヤンバルクイナや、日本周辺にしか生息しないオオミズナギドリの生態研究なども行っています。

これらの研究活動を支える資金はどこから出ているのでしょうか。山階鳥研は財団法人であり、「基本財産」の運用益で活動するのが本筋です。ところが、設立当時との貨幣価値の違いや超低金利などで基本財産の運用益ではまったくまかなうことができません。現在、研究費については公的補助金あるいは民間の研究金や委託事業の獲得などによりまかなっていますが、人件費や施設の維持管理等については一般からのご寄附や賛助会員の会費収入に頼らなければ成り立っていかない状況です。

山階鳥研の活動をご支援くださる賛助会員の皆さんには、ご援助へのお礼に隔月刊行の広報紙「山階鳥研NEWS」をお送りしています。もちろんご寄附も歓迎します。山階鳥研は「特定公益増進法人」に認定されており、ご寄附には税法上の優遇措置が適用されます。山階鳥研の活動を応援していただきますよう、なにとぞよろしくご検討をお願いいたします。

### 賛助会員・ご寄附の問い合わせ先

270-1145 千葉県我孫子市高野山115

(財) 山階鳥類研究所事務局

電話：04-7182-1101

Eメール：kaiin@yamashina.or.jp

URL：http://www.yamashina.or.jp



石狩川河口

2008. 8. 17

札幌市東区

大橋 晃

私にとっては愛護会の探鳥会は数年ぶり、秋の気配を感じさせる晴天・無風の絶好のコンディションのもとで、期待いっぱいに参加しました。

まだ海水浴客が少しいる砂浜を歩き始めてまもなく、ミユビシギとトウネンが数羽、波打ち際を行ったり来たり、思わず「かわいい」の声が上がりました。さらに進むとメダイチドリやイソシギ、河口から川の方に入ったところできれいな鳴き声でとぶアオアシシギ、さらには（私は確認できませんでしたが）アジサシのダイビングなど、「反っ

た」のとか「シャクった」のは見られませんでした。秋のシギ・チドリ幕開けとしてはまずまずというところでしょうか。

はまなすの丘に入ると、鳥を探す「上目」と夏から秋に移ろう花や植物を探す「下目」の両目使いとなり、植物に詳しくない私にとっては良い「目と耳」学問になりました。ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワなどの草原の鳥に続いて、圧巻は草原の上をホバリングしながら獲物をねらうチョウゲンボウ早でした。

探鳥会の良いところは、何といっても数十という目で鳥を探せるということです。年とともに目の衰えを自覚せざるをえない私にとっては、二つの目では今日の半分ぐらいしか見つけられないでしょう。幹事の皆さん、参加者の皆さん本当に有難う御座いました。

ひとつ気になったのは、河口部の海岸の浸食です。去年は海岸線を歩けたのに、今日は一部丘の海浜植物を踏みつけながら歩かざるをえませんでした。昔の広大な干潟を知っ

ているだけに、この先どうになってしまうのか気がかりです。

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ミサゴ、トビ、チョウゲンボウ、メダイチドリ、トウネン、アオアシシギ、イソシギ、ミユビシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、アジサシ、ヒバリ、ノビタキ、オオジュリン、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上21種

【参加者】五十嵐、岩崎孝博、大谷光良・久仁子、大橋晃、岡部良雄・三冬、荻部栄一、栗林宏三、後藤義民、斎藤昌子、佐藤優子、品川睦生、新城 久、高田征男、高橋きよ子、高橋宣子、高橋良直、田川 実・ひろ子、竹田芳範、田辺 至、辻 雅司・方子、徳田恵美、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、成澤里美、畑 正輔、濱野由美子、林 迪子、原 美保、樋口孝城・陽子、平野規子、広木朋子、松原寛直・敏子・ゆたか、村上茂夫、紅葉昭彦、柳川 巖、山本和昭、横山加奈子、吉中宏太郎・久子、渡辺 借

以上49名

【担当幹事】中正憲信、栗林宏三

## 鵠川河口

2008. 8. 31

俱知安町 山下 茂

8月31日、鵠川河口の観察会に参加しました。晴天に恵まれた残暑の厳しい一日でした。出迎えてくれた野鳥は28種で、シギ・チドリは7種でした。

私にとって鵠川河口は、とても思い出深い場所です。10年程前にむかわ町で暮らしていたことがあります。その時に故柳沢先生に出会い、かつての河口干潟の姿や数千羽以上飛来するシギ・チドリの様子を教えて頂いたことがありました。お会いした頃には既に海岸浸食の影響で干潟は減少していましたが、先生の言葉を境にするようにむかわ町では「ネイチャー研究会」が発足しました。「昔のようにシギ・チドリが飛来する干潟を復活させよう！」とむかわ町の皆さんが関係機関と連携しながら保全活動を進めておりました。現在はその甲斐あって、河口の海岸浸食を抑え、人工干潟(2.7ha)が造成されるまで至りました。

観察会当日、その人工干潟では、私の大好きなアオアシシギが餌を求め走りまわっていました。エリマキシギも見え隠れしていました。人工干潟の姿もだいぶ自然の趣がでてきた素敵な感じですが、ただサンカクイヤガマなどの植物が干潟へ必要以上に入り込んでいるのが少々気になりました。ブルドーザーで数年一度は干潟をならし対処するといいますが、維持・管理を進めるのも努力が必要ということでした。

鵠川河口は、多くの人たちの想いが詰まる不思議な探鳥地のような気がします。シギ・チドリだけではなく、1年を通し多くの野鳥が飛来し人も集まります。みんなで河口を見守り、いつまでも野鳥の宝庫であってほしいと思いま

した。

野鳥、そして鳥好きの仲間にお会いでき、楽しく観察会を終えることができました。ありがとうございました。

【記録された鳥】カイツブリ、ウミウ、ダイサギ、アオサギ、トビ、チュウヒ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、ムナグロ、コチドリ、オオソリハシシギ、アオアシシギ、イソシギ、キアシシギ、エリマキシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、キジバト、カワセミ、ショウドウツバメ、ツバメ、ハクセキレイ、ノビタキ、カワラヒワ、スズメ、ハシボソガラス、ドバト

以上28種

【参加者】小山内恵子、門村徳男、工藤高史、小堀煌治、坂井伍一・俊子、品川睦生、高橋宣子、館山 睿、田中哲郎・洋子、辻 雅司・方子、手代木孝之・敬子、戸津高保、成澤里美、西尾ミツエ、畑 正輔、浜野チエ子、濱野由美子、樋口孝城、藤谷節子、松原寛直・敏子、箕島祥子、宮森 泰・美保子、山下 茂、山田良造、吉中宏太郎・久子、鷲田善幸

以上33名

【担当幹事】門村徳男、樋口孝城

## 野幌森林公園

2008. 9. 7

【記録された鳥】カイツブリ、オシドリ、マガモ、キジバト、アオバト、アマツバメsp.、カワセミ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、キビタキ、サメビタキ、コサメビタキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、メジロ、アオジ、イカル、シメ

以上23種

【参加者】阿部真美、井上公雄、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、佐藤優子、清水朋子、品川睦生、竹田芳範、田中洋・雅子、戸津高保、成澤里美、濱野由美子、平野規子、広木朋子、辺見敦子、村木敬太郎、吉田慶子

以上19名

【担当幹事】品川睦生、成澤里美

## 石狩川河口

2008. 9. 28

【記録された鳥】ウミウ、アオサギ、ミサゴ、トビ、ハヤブサ、オナガガモ、スズガモ、ムナグロ、メダイチドリ、トウネン、ハマシギ、ウミネコ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ヒバリ、ノビタキ、カワラヒワ、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上19種

【参加者】阿部真美、板田孝弘、今村三枝子、岩崎孝博、内山純一・雅子、大吉五夫・信子、蒲澤鉄太郎、栗林宏三、後藤義民、坂井伍一・俊子、品川睦生、白澤昌彦、田中

洋・雅子、戸津高保、成澤里美、蓮井 肇・あかね、畑正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城・陽子、松原寛直、村本敬太郎、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上33名

【担当幹事】岩崎孝博、横山加奈子

## 宮 島 沼

2008. 10. 5

札幌市西区 北山 政人

2008年10月5日、天候にも恵まれて宮島沼の探鳥会は行なわれました。集合時間の1時間前ぐらいから、熱心な会員の皆さんが続々と集ってきます。秋の宮島沼は、春のシーズンのように長くマガンたちが羽を休める事が無く、群の出入りも多いのですが、前日の個体数のカウントでは約48,000という事でした。多くの個体は採食の為にいて、その数にはとても及びはしないのですが、沼にはマガンの群が羽を休めています。少数ですがヒシクイも見られました。ハクガンの成鳥が一羽、マガンの群の中にいて、白く美しい姿を多くの参加者の方々が望遠鏡で、じっくり観察する事ができました。カリガネも確認できましたが、対岸の方で距離が遠く、一ヶ所にとどまらず、マガンの群の中を動いていたので観察しにくい状況でした。カモ類は春の探鳥会よりも今回の方が種類も個体数も多く見られました。狩猟期間に入っている事も少なからず影響しているのでしょうか、10月に入ると、カモ類は安心して羽を休める場所に集中する傾向があると思います。マガモやオナガガモ、コガモなどの普通種でも、多くはまだ非繁殖羽、エクリプスの状態なので、雌雄の識別が難しいのですが、それらを、じっくりと観察する楽しみもあるので、個人的には秋のカモウオッチングは好きです。英名で「シャベルを持つ」、学名では「盾で武装した」の意を持つハシビロガモの嘴を良く望遠鏡で見ていると、鳥の種名の由来と語源を調べてみるのも面白いのでは、と思ってしまう。宮島沼での探鳥会の楽しみの一つに猛禽類、タカ目の鳥を目にしやすいた事があります。この日もチュウヒ、オジロワシ、オオタカ、ノスリ、ミサゴ、トビを入れると6種類確認できました。スズメ目の鳥の記録は少なくなかったのですが、南へ向かうマガンをはじめとする鳥たちの様子を十分に観察する事ができた探鳥会でした。宮島沼と、その周辺が将来水鳥たちの重要な渡りの中継地として存在して、鳥たちと人間が共生できる場所となる事を祈ります。

【記録された鳥】カイツブリ、アオサギ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、チュウヒ、オオタカ、ノスリ、マガン、カリガネ、ヒシクイ、ハクガン、マガモ、カルガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、ハシビロガモ、キンクロハジロ、カワセミ、ヒバリ、カワラヒワ、ムクドリ、ハシブトガラス

以上24種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、内山純一・雅子、河端正晴・満寿美、岸谷美恵子、北山政人、小西峰夫・芙美枝、品川睦生、杉田範男、高橋良直、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、早坂泰夫、原 美保、松原寛直・敏子、山本和昭、山本昌子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上34名

【担当幹事】北山政人、中正憲信

## 野幌森林公園

2008. 10. 12

札幌市東区 平沢 芳史

「けっこう晴れ間が出てきましたよ！」今日の探鳥会に誘ってくれた幹事の道場さんと僕ら夫婦は、まだ車の少ない野幌森林公園の大沢口駐車場で空を眺めていた。前日までの天気予報では曇りの予報だったのに、そこは爽やかな風が吹き上空の青空を早くもノスリらしき猛禽が旋回していたから気がはやる。

僕が野鳥に興味を持ち始めたのは約10年前、内容をよく知らずに始めた環境調査のアルバイトがきっかけでした。世の中に鳥を見てお金がもらえる（実際はそんな簡単なものではないですが）そんな仕事があるのを知り目から鱗でした。それは助手だったので、もちろん自分が種の同定をする訳ではないですが、野鳥図鑑と双眼鏡を交互に見比べては満足していました。

そのアルバイトを辞めた後も野鳥そのものへの興味を失うことなく、札幌市内でも趣味の山歩きでも、野鳥のさえずりや上空を優雅に旋回する猛禽が気になるようになっていました。そんな訳で、野鳥は好きですがそれだけを目的にフィールドに出かける事は少なく、いつも「おまけ」的な位置づけだった野鳥観察が、今回は主役に踊り出ることになりました。落ち葉が敷き詰められた散策路を、総勢30人以上の方々が集りそれぞれのペースで歩き出すと、最初にアカゲラが姿を見せた。その後もゴジュウカラ、ハシブトガラ、ヤマガラなどが忙しそうに飛び回る。彼らは常に小刻みに移動しているのに、まるで疲れた顔を見せないのが素晴らしい。小鳥からだって学ぶことは多いのである。

この日、いちばん興奮したのはオオアカゲラですね。ハッキリと「これが」と思いながら見たのは何年ぶり？おそらく自分だけだと気づかずにいたのかもしれませんが。初対面でも皆さんが親切にアドバイスしてくれる、これも「探鳥会」の良いところでしょうね。

そんな事を思いながら歩く4時間は意外とあっという間に過ぎてしまい、最後は全員で今日の野鳥を確認。どうやら出現した種類はやや控めだったようですが、初参加の僕らには比較対象がないので全く問題なし。カツラの木の甘い匂いを嗅ぎながら、時期はずれのウグイスに出会い、赤

や黄色に色づいた森を歩く。それだけでも参加した価値は十分にありましたね。「おまけ」にしておくにはもったいない、そう感じたとても素敵な1日になりました。

【記録された鳥】カイツブリ、トビ、マガモ、コガモ、コゲラ、オオアカゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ウグイス、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、イカル

以上19種

【参加者】阿部真美、井上公雄、今村三枝子、牛込直人、金山香里、河端正晴・満寿美、後藤義民、品川睦生、清水朋子、須田 節、高砂恵美子、高田征男、竹田芳範、田中 洋・雅子、田辺 至、辻 方子、道場 優、戸津高保、内木克巳・靖子、中正憲信・弘子、成澤里美、野坂英三、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、早坂泰夫、平沢芳史、平澤千春、平野規子、広木朋子、辺見敦子、松原寛直・敏子、村上茂夫、室野文男、山田良造、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子

以上45名

【担当幹事】後藤義民、道場 優

## 野幌森林公園

2008. 11. 2

【記録された鳥】トビ、フクロウ、コゲラ、アカゲラ、ヤマゲラ、ヒヨドリ、ルリビタキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、アオジ、カワラヒワ、シメ、ハシブトガラス

以上18種

【参加者】阿部真美、内山純一・雅子、後藤義民、小西峰夫・芙美枝、品川睦生、坂井伍一、清水朋子、鈴木マミ、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、道場 優、戸津高保、中嶋慶子、成澤里美、蓮井 肇、畑 正輔、樋口孝城、平野規子、辺見敦子、松原寛直・敏子、横山加奈子

以上26名

【担当幹事】道場 優、松原寛直

## 野鳥との出会い ウトナイ湖

2008. 11. 9

札幌市西区 小松 正幸

野鳥を見るようになったのは、8年程まえになりますが、犬の散歩に発寒川の河川敷で、岩に腰掛けて一休みして、川の流れをみていたら、綺麗な青い鳥が目の前を飛んだのです。その美しさに見とれ、感動したのが始まりでした。幸せを運んでくるという青い鳥に間違いのないと思い、見れた日は、吉兆の予感をもって仕事にむかう日々でした、その鳥の名は図鑑で調べたら、翡翠(カワセミ)でした。空と宝石とも呼ばれる。それ以来毎朝の散歩は彼女を探す

散歩です。チーと言う声を追いかけては川を上下にさまよいました。背中のコバルトの青と胸の橙色そして頬つべたの白、ダイビングしてフィッシングする姿、何回見ても眼に焼きつきます。そのようにして毎日川面を見ていると、彼女ばかりではなく、違った種類の、これまた綺麗な鳥に出会います。アカゲラ、キセキレイ、オオルリ、イソシギ、ホオジロ、ノゴマ、コムクドリ、ウソ、レンジャク、アカハラ、キビタキ、ヤマセミ、その他、これらは今だから識別できるもので、その当時は例えば、川の向こう岸の高い梢で鳴くこの世のものとも思われない素晴らしく綺麗な声のオオルリの名前さえ知らなかったのです。ソプラノ歌手の声よりも綺麗なものは、天国から聞こえる声のせいかと思った程である。そんな思い入れがあって、3年前に道新文化センターの小堀先生の教室に通うようになりました。そこで野鳥の世界はまだまだ広く、面白いという事を教えてもらいましたので、まだまだ知りたいという好奇心でこの度、野鳥愛護会に入会させてもらいました。還暦を少し過ぎたニューフェイスですどうぞ、宜しくご教示、お付き合い御願ひ致します。ウトナイ湖の探鳥会、まだ見たことの無い鳥で見れなかったのが何羽かありました。それが少し残念でしたが、セグロセキレイを初めて間近に見ることができて、良かった。マガンの大群の飛翔はすごいですね、空が暗くなる程でした。あの鳥が4,000kmも渡るなんて…。そしてオオハクチョウの大きさと人懐っこさ、彼らが飛ぶときに切る、風の音を聞いたとき、そのエネルギーはどこで得ているのか、なんのために渡るのか。さらにさらに小生の好奇心は膨らみます。

自己流俳句 三句

艶やかさ 臉に飛び込む カワセミかな  
カワセミの 羽根コバルトの 水を切り  
朝日背に 川しょうびんと 居る時間

【記録された鳥】ハジロカイツブリ、ウsp.、ダイサギ、アオサギ、ミサゴ、トビ、オジロワシ、ハイタカ、コチョウゲンボウ、ノスリ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガン、ヒドリガモ、オカヨシガモ、コガモ、マガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、ホオジロガモ、ミコアイサ、カワアイサ、オオセグロカモメ、ユリカモメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウカラ、アオジ、カワラヒワ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス

以上37種

【参加者】阿部真美、今村三枝子、岩崎孝博、内山純一・雅子、蒲澤鉄太郎、北山政人、小松正幸、小堀煌治、坂井伍一・俊子、品川睦生、清水朋子、田中 洋・雅子、辻 雅司・方子、戸津高保・以知子、中正憲信・弘子、成澤里美、蓮井 肇、畑 正輔、浜野チエ子、原 美保、樋口孝城、松原寛直・敏子、村木敬太郎、山田良造、山本和昭、横山加奈子、吉田慶子、吉中宏太郎・久子、鷺田善幸

以上37名

【担当幹事】北山政人、鷺田善幸



【小樽港】 2009年1月18日(日)

昨年と同じように、札幌からの貸切バスを利用します。以下の要領で行いますので、参加希望者は申込下さい。なお、探鳥会年間予定表では大通り道新ビル前に午前8時20分集

合になっていますが、下記に変更になりました。「鐘の広場」に集合してから全員一緒にバスまで移動になりますので、集合時刻を厳守して下さい。遅れるとバスの場所がわからなくなります。

集合場所 札幌駅北口(中央)「鐘の広場」

集合時刻 午前8時20分

帰着時刻 午後4時頃

定員 45名

参加費 1,500円

申込先 蒲澤幹事(011-663-9783)

1月5日午前9時から電話で受け付け、定員になり次第締め切ります。

その他

- ・札幌駅北口から小樽まで直行し、小樽駅で小休止してから探鳥コースに入ります。
- ・フェリーターミナルで昼食を取ります。昼食を持参下さい。食堂もありますが、混雑の恐れがあります。
- ・往復とも途中乗車・下車の場所を設けることは予定していません。

【野幌森林公園】 2009年2月1日(日)

集合 午前9時 野幌森林公園大沢口

交通 新札幌駅ターミナル発

夕鉄バス(文京通西行)大沢口入り口下車

JRバス(文京台循環線)文京台南町下車

各徒歩5分

【円山公園】 2009年3月1日(日)

集合 午前9時 円山公園管理事務所前

交通 地下鉄東西線 円山公園下車 徒歩8分

【ウトナイ湖】 2009年3月22日(日)

集合 午前9時30分 野生鳥獣保護センター駐車場

交通 千歳空港発のバスがあります。

☆昼食、雨具、観察用具、筆記用具などをお持ち下さい。

☆何れの探鳥会も悪天候でない限り行います。

☆探鳥会の問い合わせ

白澤幹事(011-563-5158)

# 鳥民だより

◆新年講演会のご案内◆

・日時 平成21年1月10日(土)13:30(開演)~16:30

・場所 札幌エルプラザ内

札幌市男女共同参画センター 4階大研修室

札幌市北区北8条西3丁目

(JR札幌駅北口より徒歩3分)

・講師 樋口 孝城氏

(北海道野鳥愛護会広報幹事・石狩鳥類研究会主宰)

・演題 「石狩の鳥・北海道の鳥」

・講演内容

石狩支庁管内の野鳥記録について、北海道さらには日本全体の鳥類記録と関連させながら、硬い話、柔らかい話を取り混ぜてお話しします。

・野鳥写真映写(15:20ぐらいから)

皆さんの持ち寄った野鳥写真を映写します。写真準備などの問い合わせは高橋幹事まで。

(BRB32264@nifty.com)

・会費 500円

・懇親会 新年講演会終了後、煉瓦亭(北1西3、三和ビル地下)で行います。会費は3,000円程度です。前もつての申込は不要です。どうぞご参加下さい。

◆新著紹介◆

会員の藤巻裕蔵さんが主宰する極東鳥類研究会から以下が発刊されました。

・書名 鳥類・哺乳類ロシア語辞典

・体裁 B5版、117ページ

・価格 1,000円(送料は当研究会で負担します)

・内容 ロシアの鳥類と哺乳類のロシア名、学名、和名についてまとめたもの。種の名称以外に、文献などを読むさいに比較的頻繁に出てくるような体の部位の名称、行動、生息環境に関する用語もごく一部ではあるが含めた。比較的ポピュラーな種については、分布、形態、生態について簡単な解説をつけた。

・申込 072-0005 美唄市東4条北2丁目

藤巻 裕蔵

[新しく会員になられた方々]

馬田 勝義 長崎県佐世保市

内木 克巳 札幌市清田区

内山 純一・雅子 札幌市北区

小松 正幸 札幌市西区

石神 直登・美代子 石狩市

玉田 克巳 江別市

[北海道野鳥愛護会] 年会費 個人2,000円、家族3,000円(会計年度4月より)

郵便振替 02710-5-18287

〒060-0003 札幌市中央区北3条西11丁目加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011)251-5465

HPのアドレス <http://homepage2.nifty.com/aigokai/>